

【資料8】令和6年度がんゲノム医療コーディネータ研修事前事後問題と解説の作成
 厚生労働科学研究費補助金 がん対策推進総合研究事業 がんゲノム医療推進に向けたがん遺伝子パネル検査の実態把握とがんゲノム医療提供体制構築に資する研究班(研究代表者 大津敦)に協力して作成

<事前・事後問題>

遺伝性腫瘍、germline findings と遺伝カウンセリング
 下記の中から誤っているものを1つ選べ。

- ア. わが国のがんゲノム医療の定義(がんゲノム医療推進コンソーシアム懇談会 報告書～国民参加型がんゲノム医療の構築に向けて～)には「未発症者に対するがん予防」も含まれる
- イ. 遺伝性腫瘍の原因遺伝子を知ることは治療薬の選択や薬剤感受性の推定に有用である。
- ウ. マイクロサテライト不安定性検査(MSI検査)はリンチ症候群の確定診断に用いられる。
- エ. がん遺伝子パネル検査(CGP)は遺伝性腫瘍の確定診断に用いることができない(2024年3月時点)。
- オ. 海外では遺伝性腫瘍の診断に多遺伝子パネル検査(Multi-Gene Panel Testing)が汎用されている。

<解説>

- ア. 正しい(スライド5と29)。がんゲノム医療推進コンソーシアム懇談会 報告書～国民参加型がんゲノム医療の構築に向けて～(厚生労働省HP 平成29年6月27日)では「がん患者の腫瘍部および正常部のゲノム情報を用いて治療の最適化・予後予測・発症予防をおこなう医療。未発症者も対象とすることがある。」と述べられている。
- イ. 正しい。例として、オラパリブ(リムパーザ錠)などのPARP阻害薬や白金製剤はHBOCの原因遺伝子であるBRCA1またはBRCA2病的バリエーション保持者で高感受性を示す(スライド14, 15)。またペムプロリズマブ(キイトルーダ点滴静注)などの免疫チェックポイント阻害薬はLynch症候群に特徴的なMSI-H癌で高感受性を示す(スライド14, 19)。
- ウ. 誤り。マイクロサテライト不安定性(MSI)検査, 免疫組織化学染色(IHC)はリンチ症候群の絞り込みの検査(スクリーニング)に用いられるものの、確定診断はミスマッチ修復遺伝子(MMR遺伝子)の遺伝学的検査によってのみなされる
- エ. 正しい。遺伝性腫瘍の確定診断は血液などの「遺伝学的検査」によってのみ可能である。腫瘍組織(T)/血液などの正常部(N)のペアサンプルを用いたCGPも、薬機法上は遺伝性腫瘍診断の適応はない。CGPからは推定可能な場合があるが、確定診断にならない。遺伝性腫瘍診断のための遺伝学的検査とは検出法や病原性評価のパイプラインが異なり、偽陰性の可能性がある(スライド24)。
- オ. 正しい。海外では2014年以降単一遺伝子の遺伝学的検査よりもMGPTが汎用されてきた(スライド28)。

<事前事後問題の正答率>

研修前後の正答率(問4が研修担当プログラム)

